学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業

自治体名

岩手県山田町、大槌町、大船渡市、陸前高田市

学校数

震災後の地域の状況・仮設住宅数

震災による甚大な被害があり、多くの住民が仮設住宅での暮らしを余儀なくされている。仮設住宅数、山田町 1990 戸・大槌町 2146 戸・大船渡市 1811 戸・陸前高田市 2168 戸。公立図書館も大きな被害を受ける。

＜取組名＞　～図書サービス支援活動～

取組概要

実施形態（該当に○）	自治体単独実施	団体等との連携実施	大学との連携実施	（連携している団体等・大学の名称）
		○		公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
実施主体・場所等	**コーディネーター数**	**ボランティア延べ人数**	**年間実施日数（回数）**	**活動場所**
				山田町、大槌町、大船渡市、陸前高田市

活動内容

※該当する内容に○

学校支援	学習支援	部活動指導	美化・環境整備	登下校指導	学校行事・その他
					（　　）
学校と地域の協働学習	復興学習	防災教育	伝統文化・芸能	職業体験・キャリア教育	イベント・行事・その他
					（　　）
放課後等支援	学習支援	体験・交流活動	遊び・スポーツ	児童クラブとの連携	その他
					（　　）
家庭教育・保護者支援	家庭教育講座	親子参加行事	サロン・相談対応	家庭訪問相談	その他
					（　　）
地域課題に応じた学習・交流	高齢者支援・世代間交流	心のケア・健康管理	生活再建・地域づくり	地域人材育成	その他
					（図書動　　）

＜取組の内容を具体的に記載＞

東日本大震災により、陸前高田市、大船渡市、大槌町、山田町の公立図書館は全部または一部の図書館機能を失うほど大きな被害を受けた。

上記 4 市町の住民の方が、図書サービスの提供を受けられるように 2011 年 7 月より仮設団地を中心に移動図書館活動を開始した。

図書サービスとは本の貸出のみではなく、人々が交流する場・学びの場である。特に仮設団地への入居により新たなコミュニティーが形成される中、交流の場・学びの場を提供することは、地域コミュニティー形成支援においてもっとも重要な支援の一つだと言える。

現在 26 の仮設団地へ移動図書館活動を実施している。また、大槌町・陸前高田市に図書室を開設し、大槌町仮設団地 26 ヵ所にて集会場・談話室に文庫(本棚)を設置している。

取組の変遷

準備段階

◇被災による課題

東日本大震災により、陸前高田市、大船渡市、大槌町、山田町の公立図書館は全部または一部の図書館機能を失うほど大きな被害を受けた。また、上記市町の共通の問題として、コミュニティーの問題があげられる。震災による、仮設団地入居・人口流出により地域の既存のコミュニティーが解体されてしまった。図書館とはただ本を借りる場所ではなく、地域の人が集まる場としての役割も担っていることから、地域に図書館が無くなってしまったことは、集う場を失ってしまったことを意味する。

◇住民等からの要望・必要な取組

活動開始前より各市町の教育委員会生涯学習課より共催・または後援の名義使用の許可を得ている。また、エリアとなる仮設団地の選定は、生涯学習課からアドバイスを受け、仮設団地の代表者から了解を受けて行った。

図書館活動では本を貸し出すだけではなく「お茶会」も開催し、住民同士が交流できる場づくりも行うような活動スタイルを形成した。

体制づくり・取組の実施

◇協力を呼びかけた団体・関係者、役割分担

図書館を管轄する部署である教育委員会生涯学習課から共催・後援の名義使用の許可を得ている。

活動では、教育委員会と定例会を持ち情報共有に努めている。また、ボランティアセンター、NGO/NPO ネットワーク連絡会等に参加し、支援のバッティング等を防ぐようにしている。

◇取組の充実や課題解決のための工夫

これらの図書サービスは子どもだけではなく、全世代を対象にしている。よって蔵書は絵本児童書以外に、小説や実用書なども所蔵している。仮設団地には高齢者が多い為、文字の大きい本のニーズが高いので積極的に収集している。

成果・課題や今後の展望

◇これまでの取組による成果

4/1～3/14 の期間に上記 4 市町の仮設団地を対象に移動図書館・図書室、文庫という図書サービスを通じて交流の場・学びの場を提供した。期間中に累計で約 11,455 人の方が図書サービスを利用し、約 27,,372 冊の本が貸出された。

移動図書館では貸出の際に仮設団地の集会所を予約し、「お茶会」も一緒に行っている。仮設団地よって異なるが、自治会が十分に結成されていない仮設団地もあり、住民同士が顔を合わす機会がない為、移動図書館の貸出の時間が貴重な時間となっている。常設の図書室においても、仮設団地の方だけでなく、家が残った在宅の方にも利用してもらえるようになり、家が残った・流された住民同士の交流の場になりつつある。

◇課題や今後の展望

発災後丸 3 年が経過し、自立再建、復興住宅への引っ越しなど、仮設住宅を出られる方が増えてきた。その一方で、仮設団地に「残された」側の孤独や焦り、格差がみられるようになった。今後、仮設団地からの退出が進み、仮設団地の統廃合も予想される。残された住民のコミュニティの問題だけではなく、転出してきた新しい住民との間のコミュニティ形成が必要になり、引き続き支援を行っている必要がある。